

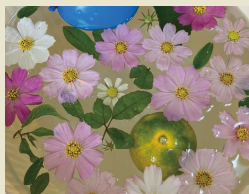
# 未来の中ノ川 水辺の癒し体験

urban design week.

松山中心部は、日常生活や憩いの場として活用される水辺空間が少ない現状があります。そこで、「中ノ川」を対象に、今は見過ごされている水辺の癒し空間を演出します。それぞれのイメージする未来の水辺を作り、ゆったり流れる時間を楽しみましょう。

## 展示内容

1. 水路に花を浮かべる  
水路に物を浮かべ、  
見て癒される水辺空間を演出します。



2. みんなで描こう、中ノ川の未来  
中ノ川の写真にアイテムを貼り付け、  
水辺空間の未来を考えます。



3. 癒し空間の創出  
木陰に椅子と机を設置し、  
水辺に親しみつつ時の流れを感じます。



## 展示会場

松山市総合コミュニティセンター 子ども館



## 実施日

10/16(日) 10:00-15:00  
10/22(土) 10:00-15:00  
10/23(日) 10:00-15:00 ※雨天中止

申込不要  
参加無料

感染状況と天候に応じてプログラム内容が中止になる場合、urban design week のアカウントにてお知らせいたします。



@ud\_week.

# 中ノ川の歴史

## ～松山－三津間通船計画～



出典：国土地理院ウェブサイト地図に松山市史第2巻近世p430図3-3-4松山－三津間舟運路線図の河川・地名の一部を追記して作成

かつて、松山と三津とを水運でつなぎ、物資を輸送している時代がありました。

湊町は、船場が置かれ、水運を通じた商業が発展、人々の交流の場として大いに賑わったとされています。

当時の賑わいに想いを馳せてみてはいかがでしょうか。

三津浜より上りは、川岸の小道に綱をつけて人力で引きあげ、下りは水流に従って、荷物の運搬をしていました。

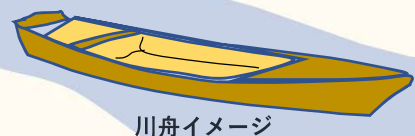
出典：松山市湊町4丁目町史「湊町」町名の由来

その当時、永町（現在の湊町三丁目、四丁目のこと。(略)）近くまで川舟が上がって来て、附近には船付場もありました。このため“港町”と言われていたようです。明治初年、(略)“湊町という現町名が生まれたようです。”

出典：松山市湊町4丁目町史「湊町」町名の由来

松山－三津間川舟運賃試算  
出典：松山市史第2巻近世

	古町－三津	外側－三津
普請入用水主賃銭	2 匁	5 匁
舟賃	9 匁	9 匁
	3 匁	3 匁
計 米1駄当たり	14 匁 0.8 匁	17 匁 0.97 匁



川舟イメージ

徳川時代の物資輸送は、遠隔地間では海上を船で、近距離の間は牛馬によることがふつうであった。陸地の場合、河川による水運が利用できる時は相当迂回しても牛馬によるよりも輸送費が安いのが一般であったが、日本の河川は急流が多かったことと、流量が季節により極めて大きく変動したことで、水運に利用できる河川は意外に少なかった。(略)

「御触状控帳」によると、松山藩は嘉永三（一八五〇）年一月、松山－三津間に舟運を設けて、試験的に実際に荷物を載せて運行させることとなった。用船は水主船頭（三人乗り、米三五俵積みの中型船で、いうまでもなく細長の平田船であろう。古町からは、三津口番所横にあった大法寺前（現在の本町五丁目）に船場を置き、大法寺川（現在の宮前川）を西に下って、衣山南で南下した後、大峰ヶ台の南を迂回するように半周して北上し、三津港の宮ノ前に結ぶものである。外側からは、中の川に面した福正寺前（現在の永代町）に船場を置き、同川を西に下って大峰ヶ台南で大法寺川と合流し、三津に結んだ。

運賃の試算を見ると、古町－三津間は用船の借り上げ代ないし減価償却費に相当する「船賃」が三匁（銭札）、水主三人の手当てが合計九匁、通船にあたっての水路整備費に相当する「普請入用冥加銀」が二匁であった。外側－三津間は、船賃・水主賃銭とも古町の場合と同じであったが、「普請入用冥加銀」のみ三匁多くなっていた。とくに中の川の水路整備に余分な経費を要したというのではなく、従来の駄賃体系が外側－三津間に差を設けていたため、その基準に合わせたものであろう。

出典：松山市史第2巻近世